



水の思い出

お田植え祭

地域おこし協力隊 田中 あかね

常陸太田市地域おこし協力隊制度が始まってから毎年お声がかかり参加させていただいているお田植え祭。今年で十回目を迎え、今まで雨が降ったことがほとんどないという奇跡的な行事。毎年、五穀豊穡を願って早乙女姿で田植えをします。

昨年、協力隊になり一番最初のイベントへの参加がこのお田植え祭でした。たくさんカメラがいるなかで「このポーズやって」などたくさん注文が飛び交いました。自分が思い描いていた協力隊の活動とは少し違っていたので、私の中でも葛藤があったのを覚えています。

しかし、活動をしていくなかで伝統を受け継ぐ意味や、地域振興の意味を担っている大きな行事だと知りました。そのような行事にお声がかかるということは、つながりを大切に行っている協力隊の私にとって「地域の伝統を繋ぐ」という大きな意味を持つ行事に関わらせていただいていることだと気づき、とても嬉しく感じるようになりました。「金砂郷の協力隊じゃないのにすいません」と言うと「そんな関係ないよ」と、笑顔でお話してくれる宮司さんの心の広さも毎年雨が降らない理由なのかなと思ったりしています。

今年のお田植え祭は去年とは違った気持ちでお田植え祭に参加し、早乙女姿で田植えをするのもなんとなく誇らしくなりました。

小粋な水府葉たばこ

―常陸太田の葉たばこ栽培の今を見つめて―

鴨志田弘子、白石百合乃、高橋靖浩、原田静雄、武藤卓、武藤千絵子



水府葉たばこの栽培

起源をたどりますと、
慶長十三（一六〇八）
年に赤土村「安養院」
の僧、宥範（ゆうはん）が江戸から
種子を持ち帰り、同村
の金田次兵衛に境内で
作付させたのが始まり
と伝えられています。

この説は、大正五（一
九一六）年に建立され

た『水府煙草栽培起源の碑』に記されています。
又、この場所には生産された葉たばこを収納
するための「たばこ収納所」がありました。昭
和二十年までは、天皇に献上する葉たばこもこ
こに納められていたと言われています。



水府煙草栽培起源の碑
(下宮河内町地内北消防署
金砂出張所裏にあります)

江戸〜明治〜大正〜昭和と時代の流れと共に
銘葉と称された水府葉たばこは、常陸太田を潤
した生産作物でした。現在、常陸太田では、木
村一郎さん（天下野町）椎名一雄さん（上利員
町）が特別契約栽培農家として葉たばこ作りを
行っておられますが、お二人以降の担い手がな

く、水府葉たばこの存続が危惧されています。

一年を通して手間を惜しむことなく、昔ながらの
製法を守り続けている芸術的な葉たばこ作りと、
水府葉たばこが「小粋」という刻みたばこになる
までの過程を訪ね歩きましたので紹介します。



太田「煙草苗配布」看板（大正6年）



水府葉乾燥風景（昭和30年代頃）

葉たばこ作りの一年

《三月》子床作り・育苗管理

ワラと竹で囲いを作り、その中にざあら（松・
クヌギ・ナラの葉）を堆肥にしたものを入れ、
その上に山土をたいらに
載せて子床を作ります。

苗作りは栃木県の農家
に一括して委託しており、
三月下旬〜四月上旬には
小さな苗が届き、子床で
畑に移せる大きさになる
まで育てます。



《四月》施肥・植え付け

四月二十日頃畑に定植します。
畝の間隔メートル、株間二十五
cm間隔で、畝はポリマルチで保温
し、特殊な道具を使って株間に
穴をあけて苗を植えて行きます。
（二反あたり役四千本）

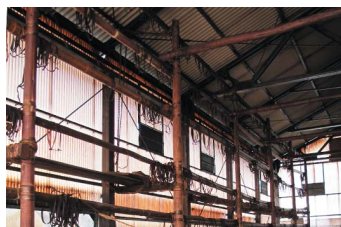


《五月〜六月》土入れ（大土寄せ・小土寄せ）・畑 の管理・乾燥小屋の準備と点検

二〜三回に分けて土寄せを行い、病虫害の防除
作業と畑周辺の管理作業を行います。その後、乾
燥小屋の準備と点検整備を行い
ながら、ハウスのビニール張作業
を行います。

原発事故の放射能対策として、
土葉の摘み取り作業を行い滅却
しなければなりません。乾燥場
の中に三か所程土を掘り、燃
すところを作ります。その上に
鉄板で作った

覆いを被せ
火事になら
ないように
安全面に注
意しながら
滅却を行
います。



《七月～八月上旬》 心止め・収穫・乾燥・常陸

心止め作業

立ち姿の美しさからか、花枝は「おいらん花」とも呼ばれています。花が五～六輪咲いてから第一花枝から下一枚で心止めします。ニコチン含有量を少なく保ち、くせを無くす等の品質向上のためにこの花を咲かせることは大事なことです。



葉の収穫と乾燥・茎を切り取ったあとの畑の整地
下から一枚ずつ葉を摘み取り、連干し・幹干しで乾燥させます。

《連干し》

下葉五枚ほど摘み取り、ビニールハウスの中で干します。麻縄の目ごとに一枚ずつ挟み両端を吊り下げます。（一本の麻縄に百数十枚程）。

急激に乾

燥させると品質が落ちるので、緑色が黄色に変わるまではビニール



ハウスの屋根を遮光ネットで覆います。

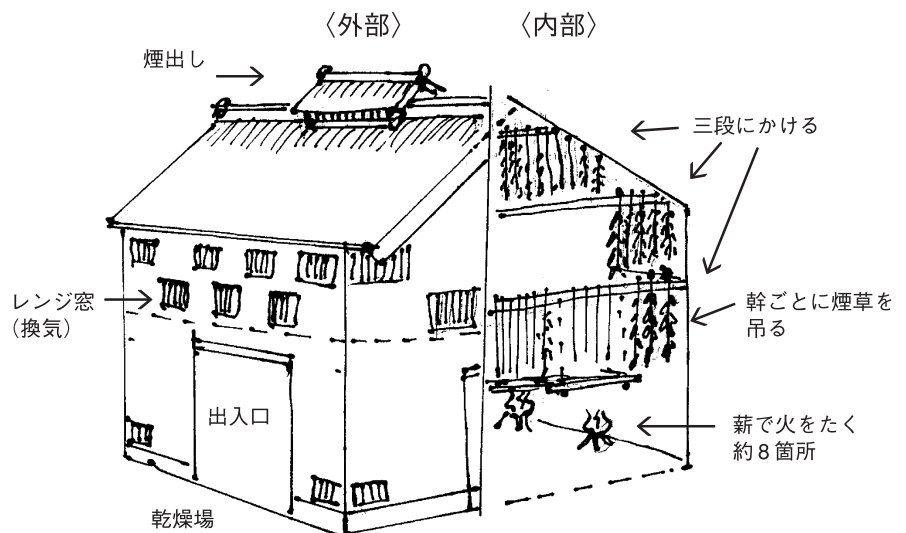
天気の様子を見ながら遮光ネットやビニールの裾の開け閉めや麻縄の吊り幅の調整（荒水切り作業）等に忙しい毎日です。

《幹干し》

幹干しは、葉をつけたまま一本ずつ幹ごと刈り取り、乾燥小屋へ運びます。根元付近に竹串を刺して乾燥小屋の天井に吊り下げ、その日の湿度の状態を見ながら午前五時から十時頃までクヌギやナラなどのマキを燃やして火力乾燥させます。（十日前後）整然と吊り下げられた葉たばこは、まるで芸術品を見ているようで美しかったです。



乾燥小屋（約15a分の乾燥を行います）



土壌環境改善のためにそばの種蒔き

葉たばこの刈取り作業が完了した後、反転耕し常陸

秋そばの種まき作業が行われます。十月には畑二面、常陸秋そばが育ち緑美しく、下旬には花が一斉に咲き、さらに美しさが増します。



関 清一さん（赤土町）提供

《八月中旬～十二月》 乾燥・のし作業・出荷

麻縄に取り付け、連干していた葉を一枚々丁寧に取り外して行きます。又、乾燥小屋で幹干しされていた葉を茎から取り外し大小に分けます。

一枚一枚丁寧に、二人で向き合い手にグリセリンを付けてのし作業を行います。一方の人が葉元の方を先に揃え、その後でもう一方の人が葉先をのしして行きます。のした葉をまとめてビニール縄で葉元を縛り、作業完了です。出来上がり次第、順次JTへ出荷します。この作業を延々と十二月中旬まで行います。



昨年（二〇一四年）は、十二月十七日に最終の納入するため須賀川のJTまで運んで行きましたが、大雪のために福島県塙町で引き返して来たとのことでした。

葉を取り外した茎は、束ねて川につけておき、そのあと自然乾燥し、焚き木にしたりします。

《一月～二月》 畑の準備と堆肥・薪づくり

山仕事

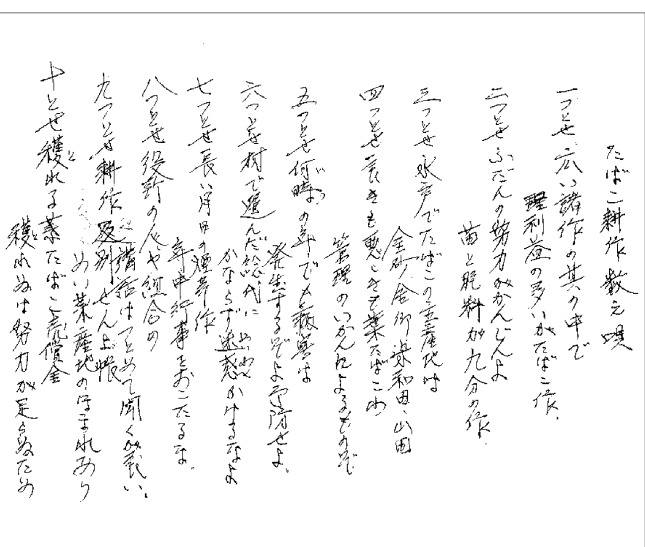
火力乾燥用の薪にするクヌギやナラの木を伐り、まき割り作業を行い、乾燥場に積み上げます。

堆肥・畑の土づくり

山から、ざあら（松・クヌギ・ナラの葉）をさらってきて堆肥を作ります。

畑に堆肥や専用肥料を施し、耕して土づくりを行います。

手間を惜しまず昔ながらの製法と技術を守り続けています。



たばこ耕作数え唄（大谷 一郎さん提供）

葉たばこ栽培の現状と刻みたばこ「小粋」

日本たばこ産業株式会社

須賀川JT東日本原料本部を訪ねて

手間を惜しまず、昔ながらの製法と技術を用いて作った、芸術品のような水府葉は十二月中旬までには、木村さん・椎名さんの手を離れ、福島県須賀川市の須賀川JT東日本原料本部に納められます。その後、日本独自の喫煙風習のキセル用刻みたばこ「小粋」という銘柄に加工されて販売されます。



水府葉たばこがどのような過程を経てタバコになるのか、JT日本たばこ産業株式会社の荒木課長にお話を伺ってきました。

小粋

百パーセント国産の在来種葉たばこ（水府・ダルマ・松川・白遠州出水・指宿）をブレンドした刻みたばこです。通常、すべての製造工程を機械で行いますが、「小粋」は殆どの工程を手作業で行い、最終的に髪の毛ほどの太さ〇・二mmの刻みにします。

短時間で吸えることや、その喫煙スタイルが受け若い人たちに人気を得ています。又、限定品としてブレンドしない水府葉のみを使用した「小粋水府」という銘柄の販売実績もあります。

葉たばこと栽培農家の現状

葉たばこは、寒暖の差が激しく土地の痩せているところが適していて、葉たばこのグレードは、葉の着位で決められています。

上（天葉）ニコチンが多い
中（本葉・中葉）一番良いところ
下（土葉）ニコチンが少ない



葉たばこは、大きく分けると黄色種・バーレー種・在来種の三種類に分けられ、全国四十府県で栽培されていますが、葉たばこ農家は少なくなり六〇〇〇戸が八六〇〇ha栽培している状況です。特に、在来種の栽培は減少が激しいです。

在来種は契約した農家が栽培しています。その契約は、特別契約栽培と一般契約栽培の二種類に分かれています。

〈特別契約栽培〉

土地にあった葉たばこを作り、その製造技術を守り、刻みたばこを製造するために欠かすことの出来ない特別の工程作業である「のし作業」の技術を持ち実践出来る農家と取り交わす契約です。全国で十六軒の農家で、水府葉の栽培農家



乾燥させた水府葉

は木村さんと椎名さんの二軒 だけです。

〈一般契約栽培〉

特殊技能である「のし作業」を行わない契約です。全国で四十五軒の農家と契約を取り交わしています。

工場見学

工場では農家さんが大型トラックに乗せたタバコを搬入しているところでした。

葉たばこはトラックからコンベアで搬入され、検査室まで送られるようになっていきます。

また別棟では搬入された葉たばこを蒸気洗浄、殺菌を行っており煙突から甘酸っぱい良い香りが漂っていました。

たばこコンベア・検査



葉たばこの搬入



高品質な水府葉

この地域で栽培される水府葉、特に赤土地区産の水府葉は昔から品質が良く、水戸藩の御領煙草になり、明治四十年には皇室御料煙草となりました。

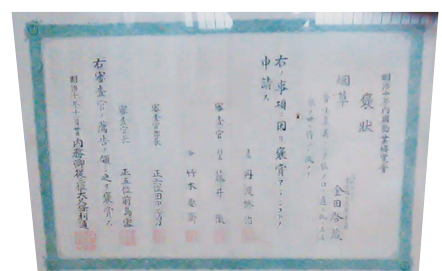
又、この地域で栽培された水府葉は、第二回内国勸業博覧会に赤土地区の金田啓蔵氏によって出品され、葉煙草部門で二等賞を受賞しました。その際には、当時の内務卿大久保利通に表彰され、その賞状は現在も、金田家で大切に保管されています。

あとがき

約一年をかけた取材を終えて、水戸市銀杏坂のたばこ店「糸久」にて小粋を購入してきました。小粋は小さなパッケージで何とも可愛らしく感じました。

紙巻たばこに比べると少々不便と感じますが、ちよつと二服に向いているような気がします。煙が出ないように吸うと格段の美味しらしいです。

愛煙家の皆様、たまには「小粋」をゆつくり味わい江戸の文化に触れ名前の通りの粋を楽しむ、というのはいかがでしょうか。



表彰状 金田 雪江 さん（赤土町）所蔵

平成二十七年四月一日に南中学校と北中学校が統合して誕生した金砂郷中学校は、生徒数が二九五名と市内の中学校では一番生徒数が多い中学校となりました。

二月九日に、南中学校体育館で新年生や保護者を対象に「入学説明会」が開催されました。両校の先生から中学校での生活に向けた説明の後、生徒会の皆さんが部活動や学校生活について説明していました。

説明会が終わった後、生徒会の皆さんに自分たちの学校の自慢や、生徒会活動を通して学んだことを聞いてみました。

南中学校の生徒は、大きな声であいさつができて元気で雰囲気明るいことが自慢。一方、北中学校は全校生徒が六三名と少人数なので、先輩後輩のみんなが家族みたいに仲良しであることが自慢だそうです。

生徒会活動を通して学んだことは、両校の生徒さんとも、一つの行事を作り上げるには沢山の人の協力が必要で、成功したときの達成感から、これからも頑張ろうという気持ちを持てたことが良かったそうです。

最後に、金砂郷中学校をどんな学校にしていきたいか聞いてみました。南中と北中の生徒会で話し合い、「個性を互いに認め合い笑顔あふれる学校」をスローガンにすることを決め、全校生徒の笑顔が

あふれる学校にしていきたいです。それぞれの学校の良さを残しながら、より良い学校にしていきたいです。

また、地域とのつながりを持つためにボランティア活動に取り組み地域に貢献していきたいです。と元気良くお話ししてくれました。

近い将来、お互いの個性や友達の良さを認め合い、笑顔がいつぱいの金砂郷中学校になつていくでしょう。



南中生徒会・北中生徒会

～金砂郷中学校をこんな学校にしたい～

個性を互いに認め合い
笑顔あふれる学校

～具体的にこんな取り組みをしていきたい～

- ①全校生徒の笑顔があふれるような楽しい行事をつくる。
- ②自分から進んであいさつができるようにあいさつ運動をする。
- ③人権宣言をつくり、友達の個性を互いに認め合えるようにする。
- ④地域とつながりをもつためにボランティア活動に取り組み、地域に貢献する。

お知らせ

「奥久慈うるしと壺木呂の会」展

期間：平成27年9月12日(土)～9月23日(水・祝)

会場：常陸太田市郷土資料館梅津会館 (0294-72-3201)

現在、奥久慈うるしの生産地として常陸大宮市（旧山方町）・大子町が知られていますが、常陸太田市も旧水府村などは古くからの産地でありましたが、漆文化の継承は途絶えた状態にあります。

この3月、奥久慈うるしの生産地を広げるべく常陸太田市内において植樹祭が行われたことをきっかけに、産地でありながら触れることの少ない、伝統技法と芸術性を備えた漆芸作家の奥久慈うるしを使った作品の展示を行います。

■ワークショップと講演 9月13日(日)

午後1時より 漆芸家 佐藤達夫氏と野口洋子氏による漆のワークショップ

午後2時より 国立歴史民俗博物館准教授・工藤雄一郎氏による講演「漆を使いこなした縄文人」

■ワークショップ 9月20日(日)

午後1時より 漆芸家 小倉永真氏による漆（蒔絵と螺鈿）のワークショップ

参加者6名ぐらいで、費用は5000円、作るものはペンダント、ブローチ、ストラップに共用できるものです。

※ワークショップのお申込みは、8月20日(木)から先着順とさせていただきます。

お問い合わせ・お申込みは特定非営利活動法人 結 (0294-72-8860)へ電話にてお願いします。

主催：NPO 法人 壺木呂の会・奥久慈うるし振興会・NPO 法人 結



ワークショップのサンプル

「思い出の絵本」

『はらぺこあおむし』 和田 良子



つてしまいました。このページの
お陰で、我が家の子供たちも、
苦手な野菜もたくさん食べる
ようになりました。

あおむしが、さなぎから蝶
になる時、絵本を蝶が飛んで
いるように、ひらひらさせて読
んでいたの、絵本は、ボロボ
ロになってしまいましたが、三
人の子供たちにとっては、心も
おなかもいっぱいにくれる
素敵な絵本でした。

作者エリック・カールさんの
コラージュを使った美しい色使い
は、いつまでも心に残っています。
はらぺこあおむしのお陰で、
畑や花壇にいる青虫が嫌いな虫
ではなくなりました。どんな
蝶になるのかなうと興味を持て
るようになりました。虫嫌いの
ママたちにもお勧めの絵本です。

子育て中は、子供たちが早
く大人になってほしいと思ってい
ましたが、今ではその時間が
親子で過ごすどんなに大切な
時間だったのかが分かります。
我が家のはらぺこあおむした
ちも、全員が社会人となりま
した。絵本の最後のページのよう
に、社会で元氣よく、美しくは
ばたき続けてほしいと願っています。

今でも月曜日から土曜日まで、
あおむしが何を食べたかを
暗記しています。

お菓子などを食べすぎて、
あおむしは、おなかが痛くな

はっと

ひといき

『オオキンケイギク』

安嶋 隆



五月〜六月に
黄色の花を咲か
せます。名前は
花の形が鶏の鶏
冠に似ているこ
とによります。

北アメリカ原

産の外来植物で市内各地の道路
沿い、のり面、庭先などで爆発的
に増えています。もともと、明治
時代に観賞用として栽培されてい

ちょっと

ひといき

『なか美』

五十嵐 弘

ご主人のお母様は水府地区のご
出身。ご主人も小さい頃からお母
様が打つそばを食べていたそうす。
お母様のそばを打っている姿を見
て育ち、ご自分でそばを打ち始め
たのが二十代の頃。仕事の合間に
趣味としてそば打ちを続け、二年
前に開店したのが「なか美」です。
「約三十年間そばを打ってきた
けれどこれで良しという心境には
なれませんが、毎日が勉強です。」
というご主人が打つそばは、香り
が立つよう粗く挽かれた「八」の「常
陸秋そば」。細くこしがあるそば
からは、常陸秋そばの香りがしっ
かりと感じられました。佐竹南



Aセット1,000円(1日5食限定)

たものが野化したものです。また
繁殖力が強いので緑化にも利用さ
れてきました。そのため現在では
あまりにも増えすぎて在来植物
に悪影響を与えているというので「特
定外来生物」に指定され、栽培・
譲渡・販売・輸出入などが禁止
されています。指定されたとはい
え、フラワールードのように群生
する様子を見ると自宅でも栽培
したくなりますが要注意です。
本来は駆除すべき植物なのです
が、「特定外来生物法」という法
律は一般に認識不足のため、人間
の心配とは関係なくどんどん増え
ています。

常陸太田の地名話 19

太田『常陸太田市太田地区』

川松 博

「太田」の地名由来には諸説が
ある。その中でよくいわれている
学説を記してみる。その二つには、
太田地方には美田が多いから「太
田」といった説。(新編常陸国誌)
「オホ」は美称で「オホタ」には
「すばらしい水田」という意味が
あるという。(古代地名語源辞典)
以前は、中城から金井下にかけ
て「真弓(眉美)千石」とよばれ
る美しい水
田が広がっ
ていた。



以前「真弓(眉美)千石」と呼ばれた水田の様子

一つには、
大田部とい
う部民が
居住していたことによるもの。大
田部という部民は、大化の改新
以前、朝廷直轄の屯田の開発や
耕作に従事した屯倉のことをいう。
(志田諄「風土記の世界」) 三つに
は、太田命という人物が居住し
ていたの、その名まえをとった。
(水府志料) このようにいろいろ
とあり、これと断定することはで
きないが、どの説も的を得ている
気がする。

常陸太田市天神林町八七〇―五二
電話 七二四六四五

営業時間
水・木・金 十一時〜十五時

土・日 十一時〜十五時
十七時半〜二十時

新太田点描 ⑪

内山逸峰の太田の印象

内山喜左衛門逸峰は越中国（富山県）宮尾

村住の裕福な農民で、熱心な浄土真宗の在家信者であった。家業に従事しながら村役等を勤め、また農閑期になると京都に出て公家に和歌を学ぶなど文雅の嗜みを身につけていた。

宝暦十年（一七六〇）、還暦を迎えた逸峰は息子に家督を譲り、翌十一年（一七六一）から全国各地を旅しては紀行文を認め和歌を詠んでいます。安永九年（一七八〇）に八十歳で亡くなりました。

今回、ここで紹介する『東路露分衣』は逸峰六十四歳、明和元年（一七六四）七月から十二月にかけて東日本の北陸・東北・関東地方を旅した時の太田地方に関する記述です。現代風に訳しながら本文を読んでみると、

明くる朝（十一月十七日）、此処（上小瀬村立野神社神主岡崎長門守宅）を出立し、その日は東蓮寺村王跡山青蓮寺に泊まりました。翌朝、此処から同じ領内の大門村枕石寺へ行くこうとして、芦間村で枕石寺への道を訪ねたところ気難しいことをいって教えてもらえなかったので、

言の葉のつれなきとてもよしやよのあしま過ぎ行きたびのならはしと、芦間村での印象を一首詠んでみた。

それから道も不確かな山路を歩きつ戻りつ辿って谷河原村の西光寺に着いたときには日も暮れていました。この里にて宿に泊めてくれるように頼んだのだけれど泊めてもらえなかった。

このため近くの辻堂の中で寝ることにしたが夕食も食べていないので非常に空腹で衰弱してしまつたが、どうすることもできないままにそこで一人で寝入った。この寺の主に限らずこの辺りの人は老若男女を問わず心持ちは強剛野蛮で物の哀れを知らないのであらうか。

この里の田ん圃に数多の鶴が群れていた。たぶん一晩中、この近くをねぐらにして集まっていたのであらう。やかましいほどに鳴き声が聞こえていたが、旅の途中なので寝て眠らなければと思つていた。

和歌の浦をおもひ出るの声はあれど

こころやはらぐ人は聞えず

夜の明けるのを待つて常陸の国久慈郡上河合村を訪ね行くと、漸くにして枕石寺の塔中に辿り着き、昨夜の谷河原村での様子を話したところ、食事されよ、ゆつくり休めよと接待してくれたので、やっと生き返つた心地がした。それから本堂の枕石寺に詣でた。

その後、額田のあみだ寺、松原村の上宮寺、大部村の真仏寺等を参詣して廻つたが、付近の芦田にはそこかしこに鶴が群れていた。そのなかでも久慈川の辺りには多く集まつて鳴いていた。

塩（湖）みつやひたちの海も潟をなみ

くじ川さしてあさる芦たづ

それより水戸城下の下町の鍋町伝右衛門とい

う者の許に知り合いの紹介で宿つた。（以下略）
……以上、これを読む限り逸峰は太田地方に関しては、あまり良い印象を持っていなかった様子である。

ところがである、この紀行文には、どうもフィクションを交えているように思える部分が多々見受けられる。

その最たるのは逸峰が、谷河原村で宿泊を断られ辻堂の中で一夜を明かしたとの記述は、かつて親鸞

聖人が雪中

に日野氏邸

宅の門前で、

石を枕に一

夜を明かし

たという故

事になぞら

えて、自ら

がその心情

を理解する

ために疑似

体験してみ

たかつたの

だらうと思

うのは考え

すぎである

うか。

（吉成英文）



富山県立図書館所蔵『東路露分衣』の太田地方に関する部分